詩編６８編１～11 節の黙想（2022 年 03 月 02 日灰の水曜日東福岡教会祈祷会奨励　松見俊）

救済の歴史における神と被造世界に働く創造主と神殿に臨在する神の混然一体性

３月２日は「灰の水曜日」（大斎始日）で、この日からレント（四旬節）が始まる。キリストの受難と復活を想起する準備の季節である。中世初期には懺悔者が頭上に灰をかぶり、後期には教会員全員が額に灰のしるしをつけられて、懺悔の印とした。また、この季節は、冬から春への移り行きの時でもある。

詩編 68 編の原文はかなり損なわれた箇所があり、他のヘブライ語聖書箇所に用いられていない単語や繋がりの薄い唐突な文章が散見される。動詞の時制もあれこれ変化する。かなり古い信仰の伝承が基礎になっているのだろうと推測される。そこで、イエス・キリストの受難の「到来」に関連づけ、到来する神：両極性の緊張の中でという黙想テーマで 11 節までを考えてみよう。まず本文を読もう。神は、「立ち上がり、到来し、神の民と共に行進する」お方である。「主」なる神は、「みなし子の父、やもめの訴えを取り上げ、孤独な人に家を与え、捕らわれ人を導き出し、貧しい人に地を備える神」である。

１．神の顕現（2-5 節）

神は居眠りしたり、座っているような方ではなく（それらの行為が悪いと言う意味ではないが)、立ち上がり（yāqūm, Qal. Imperf. ）、民の処に到来し、彼等彼女らに伴い、また、民の前にあって導き、先頭に立って荒野を行進された。(bəsa’dəkā, Qal. Inf. 2ms.）　奴隷の国エジプト脱出と荒野の 40 年を思い出させる。用いられている動詞は、祈りとして、「立ち上がって下さい」とも翻訳可能であり、あるいは、このことはすでに起こった、つまり、神はご自身をイスラエルの救いの歴史においてすでに現わされたとも翻訳可能である（appearance 顕現伝承)。この救いの歴史への回顧と礼拝における現在（presence）の経験との一体化がイスラエルの信仰共同体の共通財産である。

２．弱い者に良いものを与える神（6 節ｂ-11 節）

11 節ｂの「恵み深い神よ」の呼び掛けにおける用語は「ヘセド」ではなく、「良いこと」を意味する。「あなたの（神の)「良いもの/こと」(bətōwbātəkā）から由来し、「貧しい者」のために（lə’ānî アーナーブ）備えてくださった神よ」と翻訳するのが直訳である。神は孤児には彼らを護る「父」となり、やもめには彼女を弁護し、訴えを取り上げる神となり、孤独で寄る辺なき者には住むべき家（baytāh, houses, families）を与える方となり、捕らわれ人を繁栄へと（bakkōwōšārōwt）導き出す神である。「捕らわれ人」とくれば、彼らを解放する神と言いたい処ではあるが、「繁栄」をもたらすと言っている。

３．聖なる宮での顕現（6 節）

15 節以降では被造世界における神顕現に言及しているように思え、「雲を駆って進む」（5 節）や「地は震え、天は雨を滴らせ」（6 節）も被造世界における神の力を歌っている。しかし、6 節では神は「聖なる宮」にいますとされている。神は一方では「被造世界」における畏るべき創造主として顕現され、他方、「神殿」に住まわれる。神殿の聖なる箱のケルビムの上に臨在する神（ケルビムについ

ての他の伝承については創世記 3:24 参照、雲に乗って到来する神とケルフについては詩編 18:10－11、99:1 参照。セラフィムについてはイザヤ 6:2、6、）どちらが神顕現の場であるのかということにもなるが、原文は qādəšōw であり、聖所というより「聖」において住まうという意味である。神殿礼拝においてでも、被造世界においてでも、神は常に「聖」をその住いとしていると言ってよいだろう。神顕現においては天と地、過去と将来、中心と周辺が触れ合う。また、イスラエルをエジプトの奴隷状態から解放し、荒野を先立っていかれる「救済の神」と被造世界における神顕現・「創造の神」と神殿に臨在する神とが混然一体となっているのである。その混然一体の中で、神は「到来する神」「行動の神」である。神はイエス・キリストにおいて「到来」され、その受難において行動される。

４．この神顕現への２つの結果・応答

この神顕現に対しては、一方では、敵は散らされ、神を憎む者は御前から逃げ、吹き払われ、溶け去り、滅び、焼けつく旱魃の中に住まうことになる。他方、神に従う者は誇らかに喜び、祝い、み前に喜び祝って楽しむ。

5 節は信仰者たちへの呼びかけである。「神に向かって歌え、御名をほめ歌え。雲を駆って進む方に道を備えよ。その名を「主」と呼ぶ方の御前に喜び勇め。」ここでは、神顕現と神のみ「名」「ヤハヴェ」（YHWH）の告知とが重なる。神はあえてその名を告知する危険を冒してでも、ご自身を現わされる。つまり、受難の神である。参照出エジプト 3:14－15。

５．豊かな雨を降らせてくださった（9 節、10 節）

パレスチナでは、春の雨は「後の雨」とも言われ、３～４月頃降って穀物を実らせる。ちなみに、5 月中旬から 9 月末までは乾季でほとんど雨が降らない。春の雨は、植物だけでなく、生きとし、生けるものにとって恵みである。一雨、一雨春が近づいてくる。「地は震え、天は雨を滴らせた/シナイにいます神の御前に/神、イスラエルの神の御前に。神よ、あなたは豊かに雨を賜り/あなたの衰えていた嗣業を堅く立てて」(9－10)。ちなみに、10 月初めから 11 月下旬にかけて「前の雨」「秋の雨」が降り、土を柔らかくして耕作することを可能にする。12 月中旬から 2 月末にかけて大量の雨が降り、民衆は、乾季に備えて水槽に水を貯える。主なる神はいのちを育む神である。